

不可視の「チベット」、可視の「チベット」：欧米と日本におけるチベット・イメージ

著者	高本 康子
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	40
号	2
ページ	253-266
発行年	2015-11-27
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005965

不可視の「チベット」、可視の「チベット」

—欧米と日本におけるチベット・イメージ—

高本康子*

Image of Tibet in Modern Japan and the West

Yasuko Komoto

エレナ・ベトローヴナ・ブラヴァツカヤ（1831-1891、以下「ブラヴァツキー」）は、19世紀末から20世紀初頭の欧米において大きな影響力を持った神秘主義の啓蒙団体神智学協会の、教義を確立した人物の一人である。彼女の「宗教的、形而上学的嗜好」がチベットにあったことは、しばしば言及されるところである（オッペンハイム 1992: 215¹⁾。例えば、彼女のニューヨークの居室は、「ラマ僧院」（lamasery）と呼ばれていた。しかし、その彼女の部屋に置かれた雑多な品々は、「東洋」を連想させるものではあっても、直接チベットにかかわりを持たないものが多かった。そしてそこに集う人間たちも、チベット人でも、チベット仏教の僧侶でもなかった。従ってその場所と、実際のチベットの事物、または現実の「ラマ僧院」との関連は不明瞭であるように見える。では、何がその場を「ラマ僧院」たり得るものとしていたのか。ブラヴァツキーをめぐる状況において、何が「チベット」として表象されるものとなったのか。本稿はそのありようを手がかりに欧米および日本におけるチベット・イメージの特徴を把握しようと試みるものである²⁾。

Helena Petrovna Blavatsky is known as one of the persons who established the doctrine of Theosophical Society. It should be pointed that she had a religious and metaphysical orientation toward Tibet. For example, her house in New York was called a “lamasery.” But various items in her rooms were not directly related to Tibet, and the people in the house were neither Tibetan nor monks of Tibetan Buddhism. Although the relationship between her “lamasery” and real things of Tibet seems unclear, then, her house was given the name “lamasery”. That fact suggests a close relationship between Bla-

*北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター

Key Words: Tibet, Tibetan image, invisibility, Blavatsky, Shangri-La

キーワード: チベット, チベット・イメージ, 不可視, ブラヴァツキー, シャングリ・ラ

vatsky and Tibet.

At the same time, in Japan, young Buddhists were gathering earnestly new information concerning Buddhism in the West, such as research developments on Buddhism. The Theosophical Society and their publications were important sources of information for those young monks. They also got the information about Tibet through those contacts.

The aim of this study is to discuss the circumstances surrounding and concerning Blavatsky, in order to clarify characteristics of the formation of the image of Tibet in modern Japan and the West.

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 欧米におけるチベット・イメージ | 3 その後のチベット・イメージ |
| 2 日本における状況 | 4 おわりに |

1 欧米におけるチベット・イメージ

19世紀後半の欧米における記述に共通するのは、チベットについて、①そこがいに接近困難な場所であるか、そして②欧米人にとって価値のある、未知の何かがある場所であること、の2点である。例えば最も早く公刊されたチベット旅行記の一つであるターナーの『チベットのタシラマ宮廷派遣使節の報告』（1800年）でも、旅の開始にあたってまずベンガルとチベットの間を隔てる膨大な山塊に言及されている（Turner 1800: v）。1863年のシュラーキントヴァイト『チベットにおける仏教』（1863年）では、チベットに入り込むことが、この国の非常な高度と、外国人に向けられる現地の住民の嫉視と敵意という両方の理由による、常に多大な困難を伴うものとされた（Schlagintweit 1863: 145–146）。更に、チベット語学者として著名なハンガリー人チョマ・ド・ケレスのチベット語文法書『チベット語文法』（1834年）では、チベット仏教の僧院が、近づきたい山々の中に隔離された、訪れるものがない場所、誰にも妨げられない隠れ家であり、インド亜大陸ではすでに失われた仏典の忠実な翻訳が、完全な状態でここで発見されるだろうと一般に想像されている、と述べられている（de Koros 1996: vi）。

一方、チベット・イメージと密接な連関を持つと思われるチベット仏教、すなわち「ラマイズム」イメージについてはこの時期、本稿が注目すべきと考える、2点の特

徴が出現している。第一に挙げられるのは、「ラマイズム」を否定的に、しかも二重に否定的に捉える見方である。つまり、①釈迦から最も遠い「逸脱」した仏教であり、カトリックに類似した「腐敗」をその内部に抱えるというものである。更に、②欧米社会では容易に理解されない、別の「論理」の存在を内包するもの、という見方である。

このような特徴を端的に見ることのできる記述としては例えば、パーリ語学者リース＝デイヴィズ（1843–1922）の『仏教』（1877年）^{3）}がある。同書は、当時最も読まれた仏教概説書の一つであった。記述において「ラマイズム」の最も顕著な特徴とされるのは、釈迦が説いた最初の段階の仏教と多くの点で対立する点を持つことである。

ヨーロッパの仏教研究においては、1870年代に北方仏教・南方仏教という区分がたてられ、最も古い宗派である南方の小乗仏教が真正かつ純粋で合理的なものであり、その仏典は釈迦が説いた教えに最も近いテキストだと見なされていた。その一方で、北方仏教つまり大乘仏教であるチベット仏教は、仏教が退化と墮落のプロセスを辿ったはての最終点であると理解されていた（Lopez 1998: 35）。チベット仏教を、夾雑物が混入した墮落し退化した仏教とするこのような見解は以後も保持され、19世紀末には、例えば、長年英領インド政庁の官吏としてチベット周辺地域に滞在し、チベットについての研究を行ったオースティン・ウォデルの『チベットの仏教』（1895年）において見られるように、悪魔崇拝に擬されるまでに至っていた（Waddell 1895: 25）。

象徴的であるのは、リース＝デイヴィズが、この『仏教』の最後を、以下のような記述で締めくくることである。

ラマ教は、思考方法や教義における本質的な相違にもかかわらず、少なくとも外見上においてはローマン・カトリックと非常に類似する部分をもつ。具体的には、頭を剃った聖職者たち、鐘、数珠、仏像、聖水、豪華な衣装、聖歌隊付きの儀式、聖霊、宗教的信条、神秘的な儀式、香華、俗人、僧院長と僧侶、様々な階級の尼僧、聖処女、戦士、天使への礼拝、断食、懺悔、煉獄、それらの画像、偶像、絵画、巨大な僧院群、豪華な伽藍、強力な階級分化、法王などが、類似点として挙げられる（Rhys Davids 1925: 250）

この著作は、釈迦の生涯から始まって、仏教の「純粋な」教義、仏教にまつわる伝説などについての説明を経て仏教の伝播についての論述で終わるものである。すなわち、仏教において、時間の経過によって混入されていかざるをえない夾雑物が最も少ない釈迦の事績から始まって、仏教の各地への拡散とそれに伴う教義の変化の軌跡を

述べたものであると言える。同書末尾に、「ラマイズム」に関する上のような記述が置かれたということは、「ラマイズム」がこの軌跡の最終点、すなわち釈迦の教えから最も遠い仏教であると位置づけられていることを示している。

同時に上掲の引用は、「思考方法や教義における本質的な相違」という限定付きではあるが、カトリックとの類似を指摘するものである。そこで召喚されるカトリックのイメージは、概ね否定的なものであった。例えばリース=ディヴィズは、俗世との癒着や腐敗が容易に連想される旧態依然とした権力構造という点での、カトリックとチベット仏教の類似について述べている (Rhys Davids 1925: 246)。「ラマイズム」はまさしく、二重の意味で否定的に捉えられていると考えられる。

以上に加えて注目しておきたいのは、同時にチベット仏教が、「驚くべき大胆な論理」(Rhys Davids 1925: 210)を持つものとされたことである。「忌まわしい形態」(Rhys Davids 1925: 209)の仏像や、「まじないや空言」(Rhys Davids 1925: 207)等、様々な外様を呈する宗教的習慣が付着した外皮に包み込まれたその中に、独特の論理、欧米人にはたやすく理解できない、予想もつかない論理が、存在するとされたことである。

では、ブラヴァツキーと彼女の周辺の人々は、チベットとチベット仏教をどのように捉えていたのだろうか。それを端的に見ることができるのが、神智学者シネット(1840-1921)の『秘密仏教』(1883年)⁴⁾である。シネットは、インドで活動していたジャーナリストで、1879年末以降神智学に傾倒した。1883年に英国に帰国してからは、英国における神智学協会の活動の中心となった(オッペンハイム 1992: 235-236)。『秘密仏教』はイギリスでの彼の活動の開始、そして英国での仏教ブームの高潮⁵⁾と時期を同じくして世に出されており、この点でこの書はまさしく、この仏教ブームに呼応して書かれた著作であると言えるだろう。

この著作は、仏教におけるいわゆる「密教」を解説したものではなく、ブラヴァツキーの神智学の教義を、「仏教」に焦点を絞って概説したものである。同書の中でチベットは、ブラヴァツキーがその存在を標榜するブラザーフッド(同胞)、すなわち、マスターもしくはマハトマと呼ばれる至高の修道者(大師)の団体に関連して登場する。チベットに関する記述は非常に少ない。そのわずかな記述の中でシネットは、指導的立場にあるブラザーフッドがチベットに存在し、このブラザーフッドの霊的な優位がどんな宗教団体をも凌駕するものであるとし(Sinnett 1972: 9)、続けてチベットについて、以下のように描写した。

遠い昔からチベットには、ある特定の秘密の場所がある。そこは今日まで全く外部に知られずに来た。そこは奥義を授けられた人間を除いて、普通の人間には絶対に近づくことができない場所であった。そこはマスターたちが常に集う場所であった (Sinnett 1972: 89)

この非常に短い記述の中に、隔絶された土地、何かが隠された土地、という、従来のチベット・イメージが読みとれることは注目に値する。しかしここでの隔絶は、ターナーやシュラーキントヴァイトが記述したように、高度や住民の妨害といった次元では最早語られていない。通常の人間にはその存在すら感知することができない、という意味に変容している。またチョマが描いた、険阻な山々に隔てられた、まだ見ぬチベット語文献が眠る僧院、というイメージも、「マスター」という新しい要素を取り入れて描き直されている。チョマにとってここに秘蔵されている価値あるものとは、チベット語の諸文献のことであったが、シネットの著作ではそれが、マスターたちが太古から受け継ぐ秘密の智慧に取って代わられている。

このような読み替えは、なぜ可能であったのか。この背景には、以上に述べたような、「ラマイズム」を釈迦から遠い、しかし、欧米人の常識では計り知れない論理を持つ可能性がある何か、と捉えるイメージの存在に加え、当時の東洋研究の進展状況があると、筆者は推測する。インドのサンスクリット語文献、および、スリランカをはじめとする諸地域に残されたパーリ語文献を対象とする仏教研究は、最も積極的に進められていた分野の一つであり、チベット仏教に関してはそうではなかった。サンスクリット語およびパーリ語文献によって、より古い時代の仏教と「釈迦」に当時の探究の光が集中的に当てられていたとすれば、「ラマイズム」は、リース＝デイヴィスの記述に見られたように、これらから遠く離れた対照的な、つまり未だ未知の闇に沈む部分であり、そして、光の存在は、闇の暗さを際立たせるものでもあったと言えるだろう。このように、釈迦という宗教的権威の存在の希薄さ、そして、何か驚異的なものが存在する可能性が示唆されること、そして研究の蓄積という学的権威の存在の、やはり希薄さが、すなわち、ブラヴァツキーおよびマスターという設定を、チベットおよびチベット仏教に関連して展開する余地を提供したと、筆者は考える。

チベットのブラザーフッドが、普通の人間には感知できないもの、そして修道団体の中で最も優位にあるものとされたことは、チベットがすなわち、不可視の何か、しかも際立って優れた何かを具える場所とされていたことをも示唆する。一見、チベットとは関係のないものばかりの室内が「ラマ僧院」と呼ばれていたことには、そこにある最も重要なものが不可視の何かであり、それこそがチベットおよびチベット仏教に属するものと見なされていたことが考えられる。そしてチベット仏教の寺院に、そ

の教義を学び伝える僧侶たちがいるように、この部屋にブラヴァツキーという、不可視の何かにアクセス可能な存在があるからこそ、「ラマ僧院」と呼ばれたのだと考えられるのである。この不可視の聖地というチベット・イメージは、後述するが、1930年代になって、不老不死の秘術が古代より連綿と伝えられているユートピア、「シャングリ・ラ」として生まれ変わり、近代において最も有力なチベット・イメージの一つとなる。

2 日本における状況

日本仏教は、1887（明治20）年前後、一つの転換期を迎えていた（中村1973: 242）。江戸時代以来の各派の護教的な教学体系に対して反省と批判を加え、新しい仏教像を追い求める人々が現れていたのである。村上専精（1851-1929）や井上円了（1858-1919）、南條文雄（1849-1927）などが、それぞれの主張を掲げ、華々しく活躍を始めていた。彼らは、サンスクリット原典に基づくヨーロッパ仏教学の新しい流れの影響を受け、現実の社会に生きて活動する仏教の姿を、仏陀や祖師の姿を歴史上の事実として正確に把握することによって知ろうとした（中村1973: 260）。

浄土真宗本願寺派（西本願寺）の高等教育機関普通教校に、以下に取り上げる「反省会」が立ち上げられたのは1886（明治19）年であり、仏教改革を志向する、上述のような一連の動きに呼応したものであった⁶⁾。彼らは「海外宣教」と「禁酒進徳」を会の「二大事業」として掲げ（『反省会雑誌』1891）、仏教界の重鎮と目される人々の中で革新的な仏教者、例えば島地黙雷（1838-1911）や南條文雄などの支援をも受けて、活発に活動した。

「海外宣教」を旗印にしていることから当然ともいえるが、同会に参加した若い仏教者たちは、海外情報、特に欧米情報の吸収に積極的であった。その対象は仏教・宗教事情に限定されず、地理、歴史、政治、経済など、雑多とも表現しうるほど広範囲に亘った。「反省会」が持った神智学協会とのコンタクトは、彼等がこのように情報をとりいれるための、海の向こうへつながったいくつかのチューブの一本であり、しかも仏教に肯定的な欧米人との繋がりであることから、彼等がその中でも重要視していた一本であると言える⁷⁾。

「反省会」会員の間では、創立当初からチベットに関心が向けられていた。それは後に「入蔵熱」と呼ばれる⁸⁾。「入蔵」とは、チベットに入ることを意味する。彼等はいずれも、チベット現地に入り、その仏典を研究し日本へ将来することを目指した。

明治初年の日本仏教界においても、チベット仏教に対する関心は見られるが、それはあくまでも、チベット現地ではなく、北京の「喇嘛教」を主な対象とするものであった⁹⁾。従って、この「入蔵熱」は、大陸をみはるかす日本の仏教者の視界の中央に、チベットが登場したその最初と言えるのである。そしてそれは、「熱」と形容され得るほどに積極的であった。

彼等のこの「熱」の背景には、日本仏教界が持っていた「大乘非仏説」に対する危機感がある。上述したような、欧米におけるサンスクリット語、パーリ語文献研究の進展は、釈迦の時代に近いほど「純粋な」仏教であり、その後日本や中国などで展開された、いわゆる大乘仏教はそうではない、という見方を生んでいた。明治維新当初、「文明」の宗教たりうるかが厳しく問われた日本仏教は、ここにおいて再び、その存続にかかわる問い、すなわち仏教として「正統」たりうるかという問いを突きつけられることとなった。これに答えるために、仏教者たちが注目したのが、チベットであった。チベット仏教は膨大な仏典の集成を持つ。その仏典は、大乘仏教のものであり、しかもサンスクリット語仏典と非常に親近性のあるものとされた。従って、この未知の諸仏典のうちに、日本仏教を救う典拠となるものが存在する可能性がある、と考えられたのである。

前節で取り上げたシュラーキントヴァイトの『仏教』、シネットの『秘密仏教』は、詩人エドウィン・アーノルド（1832-1904）が釈迦の生涯を描いた長編詩『アジアの光』（1891年）¹⁰⁾とともに、「反省会」の機関誌『反省会雑誌』（のちに『反省雑誌』）に頻繁にその内容が引用され、その著者たちの動向も逐一伝えられていた。また、一部については翻訳作業も進められていた¹¹⁾。従って、この3冊は、同会において最も興味を持たれ、読まれた欧文文献に属するものであったといえるだろう。注目されるのは、まさにこの時期、「反省会」におけるチベットおよびチベット仏教に関する記述中に、以下のような表現が使用されていることである。すなわち、「中央亜細亜霊界の宝府」（『反省雑誌』1893: 1）、および「隠者民」（能海 189: 60）である。

前者が見られる「仏門の福島中佐」は、1893（明治26）年3月27日発行『反省雑誌』の社説であり、「反省会」におけるチベットへの視線を具体的に見ることができる、最初のまとまった記述である。上掲の「中央亜細亜霊界の宝府」（『反省雑誌』1893: 1）という表現は、チベットの首都ラサを指して使われている。「宝府」には、価値のあるものが存在する場所、そして「霊界」には、特にシネットの著作における、至高の修道団体がある場所、というイメージの反映を見て取れる。しかし、その「霊界」の「宝府」が、シネットのようにチベットのブラザーフードではなく、現実の都

市ラサを意味するものとなっていることに注意したい。

後者の「隠者民」(能海 189: 60)が見られるのは、「反省会」において、チベットに関する最も詳細な記述と言える¹²⁾、「反省会」会員能海寛による『世界に於ける仏教徒』(1893年)である。「隠者民」という表現には、一般人には不可視の修行者、マスターのイメージの反映が読み取れる。しかし、「霊界」の「宝府」がブラザーフットを指さなかったのと同様に、この「隠者」も、マスターではなく、現実のチベット人を意味するものとなっている。ブラザーフットとマスターという不可視の存在は、日本においていずれも、ラサとチベット人という可視のものに、読み替えられていったと考えられるのである。

3 その後のチベット・イメージ

前述したように、通常の人間には感知できない場所、マスターが受け継ぐ太古の智慧が秘蔵される場所というチベット・イメージは、1933年に発表されたジェームズ・ヒルトン (James Hilton, 1900–1954) の小説『失われた地平線』(1933年)¹³⁾によって、具体的な形象を与えられることとなった。それがチベットの奥深く、秘術を護り伝えるチベット仏教の僧院を擁した美しい谷「シャングリ・ラ」である。

『失われた地平線』において最も注目すべきことは、この「シャングリ・ラ」がチベットに設定されているという点である。例えば、記述の大半を費やして語られるのは、「シャングリ・ラ」がいかに美しい場所であるか、ということであるが、その美として紹介されるものは、宋朝の青磁や漆器など、中国由来の美しさ、もしくはショパンの楽曲など、ヨーロッパ由来の美しさであり、チベットのものではなかった。登場人物の一人である英国人男性は、「シャングリ・ラ」に住む美しい少女と恋に落ちるが、その少女もチベット人ではなく、満洲人という設定になっている。加えて、後述するように、チベット仏教の寺院が舞台であるにもかかわらず、チベット仏教についてはほとんど記述されていない。それにもかかわらず、「シャングリ・ラ」はチベットのとある場所であり、そしてその寺院は「ラマ僧院」とされているのである。

それは、「シャングリ・ラ」において、様々な美の「核心」に「神秘感」(ヒルトン 1959: 138)がおかれたことによる。チベットに「シャングリ・ラ」がおかれたその理由は、この「神秘感」に、最も現実感を与えるのがチベットという地域であったことによると考えられる。『失われた地平線』において、チベットに求められた要件は、この「神秘感」ただ一つに集約されていたと言えるだろう。ここには、ブラヴァツ

キーのアパートが「ラマ僧院」と呼ばれたのと同じ状況が見いだせる。すなわち、可視の「チベット」の不在と、不可視の「チベット」の存在である。チベットとの関連が不明瞭な室内の品々と、そこに集う人々、しかしそこには不可視の何か、至高の何かが存在し、その存在にアクセスすることのできるブラヴァツキーがそこにいるために、「ラマ僧院」という名称が与えられていた、その状況と同軌のものである。

この「シャングリ・ラ」は以後欧米において、最も顕著なチベット・イメージとなった。18世紀後半から現代までの旅行記や仏教関係書、新聞、映画、文学作品等を取り上げ、欧米のチベット・イメージを概観したピーター・ビショップが、「チベットは一貫してシャングリ・ラとしてイメージされてきたのではない」(Bishop 1989: 204)と述べたことには、かえって、この「シャングリ・ラ」のイメージが、欧米人のチベット・イメージの中でいかに支配的なものになっていったかがうかがい知れる。

この「神秘感」に、チベットがチベットたりうる要件を見て取る態度は、欧米において、その夥多、濃淡の程度は別として、フィクションの枠を越える連続性を持つものであると思われる。例えば、数度の中央アジア調査で名高いスウェーデンの地理学者スウェン・ヘディン (Sven Anders Hedin, 1865–1952)¹⁴⁾ のチベット旅行記¹⁵⁾ において、チベットに付される形容は一貫して、「神秘的な謎のやうな国」(ヘディン 1943: 208) というものである。その「神秘」は、時に幼稚さやいかかわしさを感じられざるを得ないが、しかし現実を越えた奇蹟が出現する可能性が否定しきれない魅惑的なものとされ、チベットはそれゆえに「天国」(ヘディン 1943: 318) と表現されている。

ヘディンの著作は、日中戦争開戦後、日本における大陸関係書出版ブームともいえる状況の中で、次々に翻訳された。上掲の引用は、いずれもその当時のものである。しかしそのブーム当時、同様に出版された日本人のチベット旅行記、例えば、ダライラマの親衛隊指揮官の一人となり、チベット人女性と結婚、妻子ともども日本に帰国するという経歴を持つ矢島保治郎 (1882–1963)¹⁶⁾ のチベット旅行記¹⁷⁾ におけるチベット・イメージは、ヘディンのものとは対照的なものであった。

矢島の体験記においては、チベットもしくはチベット仏教の「神秘」とは、「インキ極まるもの」(『読売新聞』1940a) であり、矢島が活眼をもって喝破する対象として示されるに過ぎない。その最も顕著な例が、ダライ・ラマの転生に関する記述である。例えば新ダライ・ラマの選出も「転生」などではなく、「結局、神秘らしいヴェールを一枚はげば、秘境西藏を繞る英国とそして重慶にまで追ひ詰められた蔣政権の新辺疆政策のカラクリがチラリと望まれる」(『読売新聞』1940b) のだと彼は断

言する。

「秘密国」チベットの「神秘」とされる様々な習慣は、人為的に作り出されたばかりばかしい欺瞞にすぎず、日本人から見ればまるで子供だましである、とするところは、例えば、日本人による最初のチベット旅行記、河口慧海の『西藏旅行記』（1904年）とも共通する。これは、近代日本人がチベットを見る場合にとる態度の、典型の一つであったと言えよう。しかしこの時期、日中戦争開戦後の日本において、この矢島の、現地のいわゆる「迷妄」を喝破する、すなわち、現地における習慣を非とし正そうとする行為こそ、「大陸」における日本人自身の存在意義として見込まれていたものであり、矢島の旅行記の記述は、いわばそのチベット版の表現であったと考えられる。

そしてこの、日本人が打破すべき「迷妄」は、小説世界においても見られる。例えば、中国青海省の辺境にある高山に日本人が挑むという筋立てを持つ、1940（昭和15）年発表の小栗虫太郎（1901-1946）「天母峰」^{ハ-モ・サムバ・チョウ}¹⁸⁾、モンゴルの独立のために日本人の少年少女が活躍する山中峯太郎（1885-1966）の小説「万国の王城」と「第九の王冠」¹⁹⁾等が、その例として挙げられる。「チベット」について、欧米において「神秘感」が、フィクションであるか否かにかかわらず広く共有されていたのと同様の状況が、日本におけるこの「迷妄」にあると言えるだろう。

4 おわりに

欧米において、「神秘感」は、「ラマイズム」の最大の魅力とされたが、日本人の記述においては、それは打破されるべき旧弊、もしくは迷信に過ぎないものとされた。日本人が「喇嘛教」を語る場合には、この迷信を打破していく過程が日本人の活躍として語られていったと言える。『失われた地平線』において「シャングリ・ラ」を「シャングリ・ラ」たらしめた「神秘感」は、日本人のチベット・イメージとの最大の差異を生むものとなったと言えよう。

欧米においては、チベット・イメージに関する論考が、1990年代に次々と現れた。村上大輔が指摘するように、チベット研究の一角とは言えないまでも、限られた範囲ながら、欧米においてチベット・イメージは学的関心の対象となり得たと言える（Murakami 2010: 271）。しかし日本においては、状況が異なる。チベットに関して、戦前は仏教学、歴史学、戦後はこれに言語学と文化人類学が加わり、高水準の研究成果が現在まで蓄積されているが、チベット・イメージに関してはほとんど関心が持たれないうえ。この背景には、チベットとチベット仏教に、「不可視」を見てきた欧

米と、あくまで現実の活動の対象、働きかけるべき「可視」の相手として捉えてきた日本との、その差異が反映しているのではないかと、筆者は考える。

注

- 1) 本稿では神智学協会に関して主として、オッペンハイム (1992)、ワシントン (1999)、Lopez (1998) を参照した。
- 2) 欧米におけるチベット・イメージについては、チベット仏教を中心に欧米人のチベット・イメージを取り上げた、Bishop (1989)、前掲 Lopez (1998) が、その代表的な研究成果であると言えよう。その他にも、Huber (1999) や、Dodin & Rather (2001) のような、文化人類学者、宗教学者、歴史学者、言語学者らの手になる学際的な論文集が出版されている。更に、現代のアメリカ映画におけるチベット・イメージに特に注目した論考として、Schell (2000) がある。2008 年には、日本の奥山直司、福山洋一等が執筆に加わった Esposito (2008) が出版された。日本人のチベット観を検討した研究成果は、本文で後述するように非常に少ないと言わざるをえないが、例えば Murakami (2010) の他、明治以降の日本人のチベット観を概観した高本 (2010a) が挙げられる。
- 3) 本書では Rhys Davids (1925) を参照した。チベット仏教については、同書 199–211, 246–250 頁を参照した。
- 4) 本稿では、Sinnott (1972) を参照した。
- 5) 1880 年前後の英国において、仏教への関心はブームとも形容すべき状態にあった (Lopez 1998: 16, 30)。このとき出版された仏教に関する文献が、19 世紀後半に入って多く出版された学術的な仏教研究書とは異なるものであり、いわば仏教の専門家ではない人々を読者に想定した、平易な内容の概説書であったことも、それを端的に示すものの一つであると言えよう。
- 6) 以下普通教校と「反省会」について本稿では主として、龍谷大学三百五十年史編集委員会 (2000) を参照した (444–469 頁)。
- 7) 例えば『反省会雑誌』第 2 号の「欧米通信会報」と題する記事の冒頭の、「該会ハ昨年八月ヲ以テ本校教職員ニテ組織セラレタルモノニテ其目的タル専ラ欧米各国ニ在ル神智各協会ト通信ヲ相為シ漸ク海外ニ弘布セントスル仏教ノ情況ヲモ詳悉シ」(『反省会雑誌』1888: 18) という記述に始まり、『反省会雑誌』誌上には頻繁に神智学協会会員との書簡のやりとりが報じられている。その後も 3 号 18 頁, 21 頁, 4 号 9 頁, 6 号 6 頁, 11 頁などに同種の記事が見られる。これらの記事から、神智学協会との交流のありようがうかがわれる。
- 8) 日本人として最初にチベット旅行記を出版した黄檗宗の僧侶河口慧海 (1866–1945) について精査したチベット学者奥山直司が、僧侶たちのこのチベットへの関心の高まりを、「入蔵熱」と形容している (奥山 2003: 104–110)。だが奥山氏のご教示によれば、羽溪了諦が明治 20 年代後半、仏教者たちの「西藏への冒険的潜入」が集中的に試みられた時期をこう名付けていたという (羽溪 1933: 103)。
- 9) これについて詳細は、高本 (2010a) に詳述した (37–48 頁)。
- 10) 『アジアの光』は釈迦の一代記であるため、チベットに関する記述はほとんど見られない。序文においてチベットという地名が、仏教圏に含まれる地域の一つとして中国、日本、ネパール等とともに挙げられるにすぎない (Arnold 1891: 7)。その他、「ヒマラヤ」という言葉が複数回、「ラマ」という言葉が一回 (Arnold 1891: 95)、「スワスチカ」というチベット仏教の象徴の一つを表す言葉が一回 (Arnold 1891: 27)、「オムマニベメフム」というチベット仏教の真言が一回 (Arnold 1891: 246) 見られる。
- 11) 例えばリース＝デイヴィズ『仏教』(*Buddhism*) はその一部分が、1887 (明治 20) 年に翻訳され、出版された (ライス、デヴィズ 1887)。アーノルドの『アジアの光』は、1890 (明治 23) 年に中川太郎が部分訳し、その後浜口恵璋らによって全訳された (『大聖釈尊』, 1908 年)。更に、『反省会雑誌』第 21 号 (明治 22 年 7 月 10 日発行) の巻末には、シネットとオルコットの著書の翻訳に有志が着手したことが広告されている。
- 12) これについては、高本 (2010b) に述べた。
- 13) この小説は、1933 年に初版が出されているが、ベストセラーとなったのは、著者ヒルト

- ンの文名を一躍高らしめた『チップス先生さようなら』(1934年)出版後の、1936年の再版であった(ヒルトン1959:321)。翌年映画化され、第10回アカデミー賞を2部門受賞、その後1973年にも再び映画化された。『失われた地平線』が日本語に翻訳されるのは、第二次世界大戦後の1950年である(ヒルトン1950)。ただし映画のシナリオは、その13年前、1937年にすでに翻訳されている(リスキン1937)。本稿では上掲『失われた地平線』(増野正衛訳、1959年)を使用した。
- 14) 本稿においては、ヘディンの履歴、著作、関連資料の検索などについて、ヘディンについての研究を精力的に続けている中央アジア探検史家金子民雄の、『ヘディン伝』に主に依拠した。『ヘディン伝』は1972年に新人物往来社から出版されているが、1988年中公文庫に再録され、更に補注に手が加えられているため、本論文では中公文庫版を使用した。金子の研究に依拠する理由は、彼が現在のところ最大の功績を持つヘディン研究者の一人であり、ヘディンの著作の訳者としては、日本においてただひとり、直接スウェーデン語の原典を読み、各国語訳をも対照の上で日本語への翻訳を行ったことにある。
- 15) ヘディンは探検の後に毎回、学術的な報告書と一般向けの旅行記の二種を出版しているが、本稿で取り上げる『チベットの征服』(1934年)は、後者に該当するものである。しかも第一回から第三回までの彼の探検行のうちチベット探検部分のみをまとめたいわば簡略版ともいべきものであった。この時この著作の日本語訳本として出版されたのは、高山洋吉訳『西藏探検記』(改造社、1939年)、吉田一次訳『西藏征旅記』(教育図書出版、1942年)、田中隆泰訳『禁断秘密の国』(青葉書房、1943年)の3点であった。この昭和期のブーム当時に出版されたチベット関連文献の中で、一つの著作に三種もの訳本があるのは、ヘディンのこの旅行記に限られる。
- 16) 矢島の履歴については研究の成果がまだ蓄積されておらず、矢島の生誕100年を記念して編まれた矢島(1983)の木村肥佐生「序文」(頁番号なし)と、浅田(1986)を除けば、山口(1987:98-103)、江本(1994:8-36,68-77)などが言及しているに過ぎない。本稿では以上を参照した他、矢島仲子氏および矢島の郷里群馬県で資料調査に尽力されている盛田武士氏その他各位より貴重なご教示をいただいた。特に記して感謝申し上げます。
- 17) これは、「辺境を探る」というタイトルのもと『読売新聞』で連載された、中国辺境地方の旅行体験談を集め連載された四部作のうちの一部を構成するものである(「南方地区」1940年6月26-29日付、「北方地区」6月30日-7月13日付、「西方地区」7月14-22日付、「西北地区」7月23-28日付)。同年のうちに読売新聞社(1940)としてまとめられ、出版された。
- 18) この作品は『新青年』(博文館)1940(昭和15)年1月号に発表されたものである。同年、『有尾人』というタイトルで他五編とともに単行本として出版された。「人外魔境」と呼ばれる一連の小説のうちの一編である。筆者は小栗虫太郎(1979)を参照した。
- 19) 「万国の王城」と「第九の王冠」は、それぞれ、一つの物語の前編と後編に相当する。前編にあたる「万国の王城」は、大日本雄弁会講談社の少女向け雑誌『少女倶楽部』に、1931(昭和6)年10月から翌年12月まで連載され、その後1933(昭和8)年に、大日本雄弁会講談社から単行本初版が出版された。その続編である「第九の王冠」は、同じく『少女倶楽部』に1933(昭和8)年1月から12月まで連載され、1935(昭和10)年に、実業之日本社から単行本が出版された。

文 献

Arnold, Edwin

1891 *The light of Asia, or the Great Renunciation, Being the Life and Teaching of Gautama, Prince of India and Founder of Buddhism*. London: K. Paul, Trench, Trübner and Co.

Bishop, P.

1989 *The Myth of Shangri-La: Tibet, Travel Writing and the Western Creation of Sacred Landscape*. London: Athlone Press.

de Koros, A. C.

1996 (1834) *A grammar of the Tibetan language*. Delhi: Sri Satguru Publications.

高本 不可視の「チベット」、可視の「チベット」

- Dodin & Rather, (ed.)
2001 *Imagining Tibet: Perceptions, Projections, and Fantasies*. Boston: Wisdom Publications.
- Esposito (ed.)
2010 *Images of Tibet in the 19th and 20th Centuries*. Paris: École française d' Extrême-Orient
- Hedin, Sven
1934 *A Conquest of Tibet*. New York: E. P. Dutton, Co., INC.
- Huber (ed.)
1999 *Sacred Spaces and Powerful Places in Tibetan Culture*. Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives.
- Lopez, S. D.
1998 *Prisoners of Shangri-La: Tibetan Buddhism and the West*. Chicago: University of Chicago Press.
- Murakami, D.
2010 Japanese Imaginings of Tibet. *Inner Asia* 12: 271–292.
- Rhys Davids, T. W.
1925 (1877) *Buddhism: Being A Sketch of the Life and Teachings of Gautama, the Buddha*. London: Society for promoting Christian Knowledge.
- Schell, O.
2001 *Virtual Tibet: Searching for Shangri-La from the Himalayas to Hollywood*. New York: Owl Publishing Company.
- Schlagintweit, E.
1863 *Buddhism in Tibet, Illustrated by Literary Documents and Objects of Religious Worship*. Leipzig: F. A. Brockhaus, London: Trübner and Co.
- Sinnett, A. P.
1972 (1934) *Esoteric Buddhism*. Varanasi, Delhi, Indological Book House.
- Turner, S.
1800 *An Account of an Embassy to the Court of the Teshoo Lama in Tibet, Containing a Narrative of a Journey through Bootan, and Part of Tibet*. London: Pall-Mall. Leipzig, F.A. Brockhaus, London, Trübner and Co.
- Waddell, L. A.
1895 *The Buddhism of Tibet or Lamaism, with Its Mystic Cults, Symbolism and Mythology, and in Its Relation to Indian Buddhism*. London: W. H. Allen & Co.
- 浅田晃彦
1986 『世界無銭旅行者 矢島保治郎』 筑摩書房。
- 江本嘉伸
1994 『西藏漂泊』 下巻, 山と溪谷社。
- 奥山直司
2003 『評伝河口慧海』 中央公論新社。
- 小栗虫太郎
1979 『人外魔境』 桃源社。
- オープンハイム
1992 『英国心霊主義の抬頭：ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』 和田芳久訳, 工作舎。
- 金子民雄
1989 (1972) 『ヘディン伝：偉大なシルクロードの探険者』 中央公論社。
- 河口慧海
1904 『西藏旅行記』 博文館。
- 高本康子
2010a 『近代日本におけるチベット像の形成と展開』 芙蓉書房出版。
2010b 「明治仏教とチベット——能海寛『世界に於ける仏教徒』を中心に」『近代仏教』 17: 18–38。
- 中村元 (他監修・編集)
1972 『アジア仏教史 日本編 近代仏教』 佼成出版社。

能海寛

1893 『世界に於ける仏教徒』 哲学書院。

羽溪了諦

1933 「明治仏教学者の海外進出」『現代仏教』105号, pp. 97-108。

ヒルトン, ジェイムス

1950 『失はれた地平線』 渡辺久子訳, 酣灯社。

1959 『失われた地平線』 増野正衛訳, 新潮社。

ヘディン, スヴェン

1939 『西藏探検記』 高山洋吉訳, 改造社。

1942 『西藏征旅記』 吉田一次訳, 教育図書出版。

1943 『禁断秘密の国』 田中隆泰訳, 青葉書房。

山口瑞鳳

1987 『チベット』 上巻, 東京大学出版会。

山中峯太郎

1931-1932 「万国の王城」『少女倶楽部』大日本雄弁会講談社。

1933a 『万国の王城』大日本雄弁会講談社。

1933b 「第九の王冠」『少女倶楽部』大日本雄弁会講談社。

1935 『第九の王冠』実業之日本社。

読売新聞社

1940 『支那辺境物語』成文堂新光社。

ワシントン, ピーター

1999 『神秘主義への扉』白幡節子, 門田俊夫訳, 中央公論新社。

ライス・デヴィズ

1887 『菩提の花』桑原啓一訳, 教典書院。

リスキン, ロバート

1937 『失はれた地平線』飯田信光訳, 映画評論社。

龍谷大学三百五十年史編集委員会

2000 『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻, 龍谷大学。

『反省会雑誌』(『反省雑誌』)

1888 「欧米通信会報」1月10日発行 18頁。

1891 「海外の事業 内国の事業」9月10日発行 1-2頁。

1893 「仏門の福島中佐」3月27日発行 1頁。

『読売新聞』

1940a 「活仏に毒を一服」年7月17日付。

1940b 「奇習・法王の即位式」7月20日付。